

JCSS Newsletter



CONTENTS

- 1 ご挨拶
- 2 2019 年度事業報告
- 3 2020 年度事業計画
- 4 シンポジウムについて
- 5 理事会現体制のご報告
- 6 2019 年決算
- 7 参加学協会の動向
- 8 イベント・カレンダー
- 9 国際動向
- 10 事務局・問い合わせ

1. ご挨拶

理事長 浦野 正樹

昨年のニュースの〈理事長就任〉挨拶で、社会学系学会の連携体にとって、各学協会の活動や関心動向を相互に知り何らかのコラボレーションに繋がりうるような仕組みをつくるのが大きな課題であり、その実現を事業の柱として掲げました。それに向け、日常活動として、Web 発信（Web サイト内の「イベント・カレンダー」など）や各学協会へのメール配信など、コンソーシアムとしての情報提供と広報活動を充実させていく方針をアナウンスし、各学協会には、大会など各種行事の開催日程・場所（及び大会プログラムの詳細を後日掲載する URL）などを比較的早い段階で連絡してもらうことや、各学協会の枠を超えた研究活動や情報共有の呼びかけ・提案などを届け出ってもらうことをお願いした次第です。

そうした日常活動を前提として、今後コンソーシアムとしては、共通する関心やニーズを探索し事業化する努力をさらに続けていくことが重要だと思っております。今年は、そうした活動の一環として、国の統計不正の問題に関して、日本社会学会と共同で 2019 年 3 月 27 日に「基幹統計における不正問題への対応と社会学の協力について」の声明を出しましたが、各学協会単独では効果的に力を発揮しにくかったり、活動の実施が難しかったりする事柄に関して、ネットワークを活用し取り組んでいけるというのが社会学系コンソーシアムの強みだろうと思います。

こうした趣旨の事業の可能性について、これまで出されてきた要望や提案としては、若手の学会員に対する支援・育成策や研究能力の養成方法などについての各学会の状況調査と情報の共有化などがあげられてきました。確かに若手研究者を取り巻く環境は、現在不安定で流動的であるだけに、各学会では無理のない形で若手研究者の研鑽を支援していくことにより研究の質を担保しつつ、学会活動の活性化を果たしていくうえで、重要な局面を迎えているように思います。そうした事業に注力することもひとつの選択かと思えます。

その他考えられる事項としては、健全な学会活動を妨げるハラスメント的事象への対応や研究倫理に関わる現状と対策についての情報共有などがあげられると思います。すでに、大学などの教育機関では複雑な職種と人間関係が絡み合っているために、上下関係だけではないさまざまなアカデミック・ハラスメントへの対応が喫緊の課題になりつつあります。学会などでも、直接的な権

力関係は伴わないまでも、学会の通常の研究活動や運営を脅かす人間関係に悩まされる事象が少なからず起きるようになってきているようにも思います。こうした事象はたいへん扱いが難しくコンソーシアムのような組織がどのように関われるかはいまだ未知数ですが、健全な学会活動を保証していくためには、さまざまな知恵を絞りながら、検討する必要が出てきているように思います。

また、災害対応などの危機状況に対する仕組みづくりを今後どのようにしていくかなども、そうした領域のひとつにあげられるかと思えます。それは会員への対応や大会等のスムーズな運営という学会組織の維持や運営の面だけでなく、災害や危機管理など大きな社会事象への知的集団としての全体的な貢献という点でも重要だと思えます。

ここ十数年に限定しても、日本で巨大規模の地震・津波災害やそれに伴う原発事故などが発生し、その影響の社会的広がりや深甚さを体験し、そうした事象に対して社会学を基盤とする知的集団がネットワークとして貢献することが期待されてきました。今後も南海トラフに起因する巨大地震や首都圏直下型地震など、大規模な津波災害や地盤災害による危険が広範に認識されるようになってきている状況を念頭におくと、そうした事態に備えた対策と社会的影響への理解や配慮の必要性が強く要請される時代になっていると思えます。異常気象がさらに深化するとともに日常化して来たために、想定を超える豪雨災害・台風災害などが次々に起こり、大規模な水害や土砂災害が頻発するようになったことなどを考慮すると、社会学を基盤とした知的集団としての全体的な貢献はさらに必要とされてきています。

社会学系コンソーシアムはまだまだ発展途上の組織であり、組織面でも情報連絡面でも活動面でも、いろいろな課題を抱えている現状がありますが、今後ひとつずつ課題を解決しながら、よりよい知的集団のネットワークとして発展していくよう努力していければと思っております。

2. 2019 年度事業報告

2019 年度の事業活動は、以下の通りです。

●統計不正に関する声明「基幹統計における不正問題への対応と社会学の協力について」の発表（日本社会学会と共同）

理事会での協議等を経て、2019 年 3 月 27 日付けで、日本社会学会と共同で統計不正問題に対する声明を発表いたしました。

●理事会の開催

第 6 期に入り、3 月、7 月に理事会を開催しました。理事業務の引継ぎと分担の決定、新たなコンソーシアム事業にむけた話し合い、今後のコンソーシアムのあり方、およびシンポジウムの企画の検討などを行いました。2020 年 1 月にも最後の理事会を開催する予定です。

●シンポジウムの実施 [予定]

2020 年 1 月 11 日に、社会学系コンソーシアム第 12 回シンポジウム「現代日本の『働く仕組み』——社会学からのアプローチ」を開催します。

3. 2020 年度事業計画（予定）

2020 年度の事業計画は、以下の通りです。

●理事会の開催

3 月、7 月、1 月に開催いたします。

●情報発信の活性化

各学協会開催のイベント情報を積極的に収集し、随時、WEB・メールで発信いたします。

●シンポジウムの開催

2021年1月に予定しております。

●刊行物『Newsletter』の発行

『Newsletter』を年に1回刊行いたします。

(事務局)

4. シンポジウムについて

2020年1月11日、日本学術会議大講堂にて、社会学系コンソーシアム主催第12回シンポジウムを開催します。

【テーマ】

現代日本の「働く仕組み」——社会学からのアプローチ

【日時】

2019年1月26日(土) 13:30~16:30

【場所】

日本学術会議大講堂(東京メトロ千代田線「乃木坂駅」5番出口徒歩1分)

【開催趣旨】

今日の日本社会では、正規/非正規雇用間の格差や「働き方」の問題をはじめ、雇用や就業をめぐる諸制度——言わば「働く仕組み」——に関してさまざまな課題が浮上し、その解決が模索されている。しかし、これらの諸制度は、教育・社会保障システムのあり方とも関連しながら相互に強い補完性を持っており、また社会の構成員が持つ認識や想定が、それらの再生産を支える役目も果たしている。そうである以上「働く仕組み」に関わる課題の解決のためには、その全体像を正確に把握した上で、それをどこからどのように変えて

いくべきか、また変えていけるのかを検討しておく必要があるだろう。このような問題関心から、本シンポジウムでは、現代日本社会の「働く仕組み」に社会学の視点を生かして接近し、その特徴を理解すると共に、変化する時代状況に合わせて今後それをどうデザインし、マネージしていくべきかを議論していく。

【開催挨拶】

浦野正樹(社会学系コンソーシアム理事長、早稲田大学教授)

【報告】

正規・非正規労働者の統合は可能か——人事管理にみる差異の論拠

高橋康二(日本労働社会学会、労働政策研究・研修機構)

日本企業にとって従業員の「キャリア」とは——海外現地採用日本人を通して見える理念型

石田賢示(東北社会学会、東京大学)

高学歴者・ホワイトカラー増加社会への職業社会学的アプローチ

藤本昌代(関西社会学会、同志社大学)

働く仕組みと暮らす仕組みとの食い違い

武川正吾(日本学術会議連携会員・福祉社会学会、明治学院大学)

【討論者】

山田真茂留(日本学術会議連携会員・関東社会学会、早稲田大学)

佐藤嘉倫(日本学術会議会員・日本社会学会、東北大学)

【閉会挨拶】

遠藤 薫(日本学術会議会員、学習院大学教授)

5. 理事会現体制のご報告

2019年12月現在、コンソーシアム理事会構成員は、以下のようになっております。

なお、任期は2020年1月31日までであり、2020年2月1日以降の運営は、理事選挙（2020年1月実施予定）の結果にもとづき、新たな理事会構成員によって行われます。

理事長	浦野正樹	（日本社会学会）	宇都宮 京子	（関東社会学会）
副理事長	坏 洋一	（日本社会福祉学会）	音 好宏	（社会情報学会）
理事	清水洋行	（地域社会学会）	有田 伸	（数理社会学会）
	井上 真	（環境社会学会）	白波瀬佐和子	（日本家族社会学会）
	吉見俊哉	（日本マス・	石原 俊	（関西社会学会）
		コミュニケーション学		
		会）		
監事	山田真茂留	（関東社会学会）	稲月 正	（日本社会学会）

（事務局）

6. 2019年度決算（自2019年1月1日～至2019年12月31日）

I. 収入の部

科 目	予算額	決算（暫定）	備考
1 会費	570,000	570,000	
(1) 年会費 1万円相当	220,000	220,000	
(2) 年会費 2万円相当	120,000	120,000	
(3) 年会費 3万円相当	30,000	30,000	
(4) 年会費 10万円相当	200,000	200,000	
2 雑収入・寄付	5	6	利子
3 前年度繰越金	770,587	770,587	
収入合計	1,340,592	1,340,593	

II. 支出の部

科 目	予算額	決算（暫定）	備考
1 事務局経費	364,000	383,686	
(1)スタッフ謝金	350,000	375,000	会計業務移管のため増（第5回理事会）
(2)HP レンタル・サーバー、ドメイン代	4,000	3,827	

(3)事務管理用品	10,000	4,859	
2 定例会議・理事会開催費	230,000	217,007	
(1)評議員会・理事会開催費	30,000	0	
(2)定例シンポジウム開催費	190,000	217,007	
(3)委員会開催費	10,000	0	
3 予備費	10,000	0	
支出小計	604,000	600,693	
4 次年度繰越金	736,592	739,900	
支出合計	1,340,592	1,340,593	

(文責 財務担当理事 宇都宮 京子)

7. 参加学協会の動向

(2019年12月現在、50音順)

環境社会学会	日本看護福祉学会
関西社会学会	日本社会学会
関東社会学会	日本社会史学会
社会事業史学会	日本社会学理論学会
社会情報学会	日本社会病理学会
数理社会学会	日本社会福祉学会
地域社会学会	日本社会分析学会
茶屋四郎次郎記念学術学会	日本スポーツ社会学会
東海社会学会	日本村落研究学会
東北社会学研究会	日本都市社会学会
東北社会学会	日本保健医療社会学会
西日本社会学会	日本マス・コミュニケーション学会
日仏社会学会	日本労働社会学会
日中社会学会	福祉社会学会
日本解放社会学会	北海道社会学会
日本家族社会学会	

8. イベント・カレンダー

3月

7-8日 第67回数理社会学会大会（立命館大学衣笠キャンパス）

<http://www.jams-sociology.org/>

9-10日 日本スポーツ社会学会第28回大会（福岡大学七隈キャンパス）

<http://www.jsss.jp/>

5月

11-12日 社会事業史学会第47回大会（北星学園大学）

<http://shakaijigyoushi-gakkai.com/KvWBqu>

11-12日 地域社会学会第44回大会（神戸学院大学）

<http://jarcs.sakura.ne.jp/main/meetings/index.html>

18-19日 第45回日本保健医療社会学会大会（東京慈恵会医科大学国領キャンパス）

<http://square.umin.ac.jp/medsocio/conf2019/>

25-26日 西日本社会学会第77回大会（佐賀大学本庄キャンパス）

<http://www2.lit.kyushu-u.ac.jp/~sociowest/taikai/index.html>

26日 日本社会福祉学会第67回春季大会（東洋大学白山キャンパス）

<http://www.jssw.jp/event/conference.html>

6月

1日 15-18時 社会情報学会社員総会シンポジウム（東京大学本郷キャンパス工学部2号館93B）

http://ssi.or.jp/committee/commit02_001.html

1-2日 関西社会学会2019年度第70回大会（関

西学院大学上ヶ原キャンパス）

https://www.ksac.jp/2019/01/27/70thconf_info/

8-9日 第67回関東社会学会大会（早稲田大学戸山キャンパス）

<http://kantohsociologicalsociety.jp/congress/information.html#aisatsu2>

8-9日 第59回環境社会学会大会（明治学院大学白金キャンパス）

http://www.jaes.jp/report_a/seminar_a/2019/5561

13日 日本学術会議 防災減災学術連携委員会主催

第2回「防災に関する日本学術会議・学協会・府省庁の連絡会」一災害時医療と理工学分野の連携

[http://www.janet-](http://www.janet-dr.com/060_event/20190613.html)

[dr.com/060_event/20190613.html](http://www.janet-dr.com/060_event/20190613.html)

15日 日本マス・コミュニケーション学会2019年度総会および春季研究発表会（立命館アジア太平洋大学）

15-16日 福祉社会学会 第17回大会（明治学院大学白金キャンパス）

<http://www.jws-assoc.jp/>

29-30日 第59回日本社会学会大会（尚絅学院大学）

<http://www.jashs.jp/>

7月

20-21日 第32回日本看護福祉学会学術大会（福岡大学）

<http://kangofukushi.sakura.ne.jp/taikai/index.htm#a0>

13日 日本学術会議 防災減災学術連携委員会
主催

第2回「防災に関する日本学術会議・学協会・府
省庁の連絡会」

[http://www.janet-
dr.com/060_event/20190613.html](http://www.janet-dr.com/060_event/20190613.html)

14-15日 東北社会学会第66回大会（東北大学川
内キャンパス）

[http://tss.sal.tohoku.ac.jp/wiki.cgi?page=%C2%E7
%B2%F1%B3%B5%CD%D7](http://tss.sal.tohoku.ac.jp/wiki.cgi?page=%C2%E7%B2%F1%B3%B5%CD%D7)

8月

30-31日 第68回数理社会学会大会（熊本県立大
学）

<http://www.jams-sociology.org/>

9月

2-3日 第35回日本解放社会学会大会（早稲田大
学）

[http://sociology.r1.shudo-u.ac.jp/lib-
erty/taikai/taikai35.html](http://sociology.r1.shudo-u.ac.jp/lib-erty/taikai/taikai35.html)

5-6日 第37回日本都市社会学大会（東洋大学
白山キャンパス）

<http://urbansocio.sakura.ne.jp/>

7-8日 日本社会学理論学会第14回大会（東洋大
学白山キャンパス）

<http://sst-j.com/?cat=2>

14-15日 第29回日本家族社会学会大会（神戸学
院大学ポートアイランドキャンパス）

<http://www.wdc-jp.com/jsfs/regulation/index.html>

14-15日 2019年社会情報学会大会（中央大学
市ヶ谷田町キャンパス）

21-22日 日本社会福祉学会第67回秋期大会（大
分大学旦野原キャンパス）

<http://www.jssw.jp/event/conference.html>

28-29日 日本社会病理学会大会 第35回大会
（流通経済大学 新松戸キャンパス）

10月

5-6日 第92回日本社会学会大会（東京女子大
学）

[http://www.gakkai.ne.jp/jss/2019/10/05000000.ph
p](http://www.gakkai.ne.jp/jss/2019/10/05000000.php)

26日 日本マス・コミュニケーション学会 2019
年度秋季研究発表会（江戸川大学）

11月

1-3日 日本労働社会学会第31回大会（早稲田大
学所沢キャンパス）

<http://jals.jp/blog/?cat=1>

12月

8日 環境社会学会第60回大会（明星大学）

<http://www.jaes.jp/>

8日 茶屋四郎次郎記念学術学会 令和1年度第1
回研究発表会（東京福祉大学池袋キャンパス8号
館）

<http://s-chaya-msi.org/>

2020年

3月

14-15日 日本スポーツ社会学会第29回大会（秋
田大学手形キャンパス）

<http://www.jsss.jp/>

5月

23-24日 西日本社会学会（ノートルダム清心女子大学）

<http://www2.lit.kyushu-u.ac.jp/~so-ciowest/taikai/index.html>

※ 2019年12月現在、各学協会ホームページ上に公表されているもの、および、当コンソーシアム事務局まで、ご連絡をいただいたものを中心に掲げております。

（事務局）

9. 国際動向

(1) 日本社会学会の国際交流

落合恵美子（日本社会学会・国際交流委員長）

日本社会学会の「国際化」の画期となったのは、周知のとおり 2014 年の ISA（国際社会学会）横浜大会の開催であった。矢澤修次郎元会長等のイニシアティブにより準備が進められた横浜大会は、長谷川公一大会実行委員長（東北大学）の熱情あふれるリーダーシップのもと、6087 人という過去最多の参加者を迎え大きな成功をおさめた。世界の様々な会議で出会う様々な国の社会学者から「横浜に行きましたよ」と声をかけられることがしばしばある。横浜大会が日本の社会学者の国際的プレゼンスを上昇させるのに大きな効果をもったのは明らかだろう。その後も続けて日本から ISA 理事を輩出し、2018 年からは白波瀬佐和子教授（東京大学）が ISA 副会長を務めておられる。

ISA における多国間の交流に加えて、日本社会学会は韓国社会学会、中国社会科学、台湾社会学会とそれぞれ 2011 年、2011 年、2012 年に交流協定を締結し、バイラテラルな交流を実施してきた。韓国社会学会、中国社会科学とはそれぞれの学会大会において日韓、日中セッションを開催することが主な活動内容である。台湾社会学会とはより柔軟な交流を実施している。韓国社会学会とは 2016 年、中国社会科学とは 2015 年と 2019 年、台湾社会学会とは 2016 年に協定の再締結を行った。

このような交流実績の上に、2019 年は特筆すべきことがあった。日韓の政治情勢の緊迫に対処するため、韓国社会学会からの提案を受けて、2019 年 9 月 20 日に明治学院大学にて日韓・韓日共同セミナー「未来の友好協力のための社会学からの提言」を開催し、共同声明を発表したのである。当日は、韓国社会学会会長の朴吉聲先生と張元皓先

生がこの会合のために訪日され、日本社会学会側は町村敬志会長以下、現理事、理事経験者、および多くの会員が参加して、前半は日韓の文化・研究の交流史と現状についての報告、後半は会場の参加者を交えた座談会という形で進行した。その後、両者で韓国語、日本語による声明を読み上げた。共同声明は「ともに向き合い対話を続けよう！」という言葉で始まり締め括られるもので、日本と韓国の社会学者が今日まで築いてきた協力体制を強化していくことにより政治的葛藤を克服するよう努めること、日本と韓国の若者が交流し歴史にたいする理解の共有と相手への共感を育むことのできる空間をつくってゆくことを言明している。また、現在生じている葛藤の根本的原因となる歴史の解釈とそれへの対応について学会としても引き続き関心を持っていくことも約束している。共同声明の全文は日本社会学会 HP にて公開されている。共同セミナー開催も共同声明の発表も、二国間交流を積み重ねることにより、信頼の絆を築いてきたからこそ可能であった。東アジアの国際関係の改善に学術交流というかたちで貢献できることが確認されたのは嬉しいことであった。しかしその一方で、韓国では新聞報道もなされたのに対して、共同セミナーの会場となった日本ではメディア報道が無かったということに課題も見えたように思う。

東アジアにおける国際交流については、もうひとつ特筆すべきことがある。東アジア社会学会の設立である。野宮大志郎教授（中央大学）が大会実行委員長を務められ、2019 年 3 月 8～9 日に中央大学駿河台記念館にて設立大会が開催された。東アジア社会学会への参加は個人単位であり、ナショナルアソシエーション単位ではないので、日本社会学会として関わるわけではないが、矢澤修次郎元会長などの長年にわたるご尽力により設立に至ったものである。日本、韓国、中国の 3 カ国から会長が出る会長 3 人体制（日本からは矢澤修次郎会長）に、東アジアの国際交流においてバラ

スをとるためのくふうが窺われる。日韓問題についても書いたように、困難はあっても学术交流のための回路を保ち続けることには大きな意義があるので、東アジア社会学会の船出をまずは寿ぎたい。しかし、設立大会では、国家間のバランスとは別の課題が明らかになったことも書き留めておきたい。それはジェンダーバランスである。3カ国から出ている全理事のうち女性は1人しかいないということに多くの参加者（特に女性たち）は衝撃を受けた。個別のセッションにおいても時代錯誤のようなジェンダーがらみのやりとりも目撃した。東アジアという地域でまとまるとき、家父長制がこれほど露わになるとは想像以上だった。この地域で女性社会学者が活躍していないとは思わない。韓国社会学会や台湾社会学会では女性会長も出ている。しかしジェンダー関係や研究者間のジェンダー規範には地域内で差があるようだ。東アジアのゆるやかなまとまりが次第に醸成されてゆくとすると、ジェンダー規範はどのあたりに落ち着くのだろう。中間をとるなどということがあってはならない。少なくとも日本の社会学界のレベルから後退することなど無いように、むしろ進めてゆけるように、日本の社会学者たちは、男性も女性も心していかなければならないと思う。

このように東アジアにおける国際交流が（さまざまな課題をもちながらも）かなりの程度達成されたことを踏まえて、日本社会学会の国際交流は新たな発展の方向を模索する時期を迎えていると言えよう。2019年の日本社会学会大会では、台湾の曾熾芬教授（国立台湾大学）、藍佩嘉教授（同）、ベトナムのクワット・チュ・ホン所長（社会開発研究所）、フィリピンのエマ・ポリオ教授（アテネオデマニラ大学）という各国を代表する社会学者を報告者・討論者としてお招きして、国際交流委員会企画の国際セッション“New Migration Trends in East and Southeast Asia”を開催した。台湾と日本の新たな移民労働者受入れ政策と、主要な送出国であるベトナムの送出し政策を共に論じるこ

とで、どちらでも「スキル」が政策的キーワードとなっていることが浮かび上がったのは大きな成果であった。またポリオ教授は気候変動の引き起こす自然災害が今日の人口移動の大きな要因となっていることに注意を喚起した。グローバル化とリスクでつながった世界を研究するには、東アジアに閉じない学术交流が不可欠であることが示されたと言えるのではなからうか。

日本社会学会大会で報告する海外の若手を対象としたトラベルグラント事業も定着し、応募者の出身地域もますます多角化している。2019年にはナイジェリア、トルコ、インドなども含む40名の応募があり、レバノン、フィリピン、台湾などからの6名が採択された。これら世界の若手と日本社会学会の若手会員との交流が進み、共同研究に発展したり、日社若手会員の海外発信につながったりするよう促すのが次の課題であると考えている。

(2) 国際学会の楽しみ方・次のステップへ

長谷川 公一（東北大学大学院文学研究科教授）

リピーターに、さらに session organizer に

世界社会学会議横浜大会などを契機に、国際学会で1度報告してみたという方に、次にお薦めしたいのは、1) リピーターになることだ。そうすれば、2) 研究分科会（Research Committee）の key player や問題関心を共有する方達と知り合いになることができる。国際会議の都度、「Hi, Koichi!」と迎え入れてくれる人がいるのは、素朴に嬉しいものだ。編著の分担執筆者に誘われたり、共同研究に誘われたりといったことにつながる可能性も少なくない。

3) 続いてお薦めしたいのは、session organizer になることだ。世界社会学会議や社会学フォーラムは、日本社会学会大会のテーマセッションのように、session ごとに報告者を募集する仕組みだ。session proposal は、2022年7月開催のメルボル

ンの世界社会学会議の場合には、これまでの通例に従うと、前年 2021 年の 2 月から 3 月に募集があるだろう。セッションの趣旨などを説明した 250 語以内の session description を提出すればいい。採用されれば、session organizer として、応募のあった abstract の中から、5・6 本程度の報告を選ぶことができる（大会前年の 9 月末が応募締切である）。大会当日は、司会をすることになる（自分自身が当該セッションで報告する場合には、司会者は他の研究者を立てなければならない）。自分の問題関心と関連する報告がどれくらい集まるのか、このセッションがどれくらい盛り上がるのか、ワクワクするところだ。セッションを盛り上げるために、討論者を立てることもお勧めだ。

既存のセッションに報告を申し込むだけでは受け身的だが、セッション自体を自分が企画するとすると、関与の仕方は一段と積極的なものになる。募集した abstract の中から、どの報告を選ぶのか、流れを考えて報告の順番を考えるなど、いろいろな意味で勉強になる。

session description はあまりにも一般的な提案の場合には採用されないリスクが高い。焦点を絞る必要がある。他方あまりにも狭すぎると、特殊すぎるということで session coordinator（各 RC（研究分科会）の会長が務める場合が多い）に採用してもらえないリスクが高まるし、実際、応募者が少なくなる可能性もある。このあたりのさじ加減が難しい。前回のプログラムや関連セッションの盛り上がり、報告内容、専門誌などの研究動向などを精査しておくべきである。提案した session が採用されたら、何人かの知人に報告を申し込むように誘ってみるのもいいことだ（ただし知人などを特別扱いするのは公平ではないので、採用を確約するようなことは厳しく慎むべきである）。

ISA のサイトでは、トロント大会や横浜大会など、最近の世界社会学会議やフォーラムのプログラムやアブストラクトを公開している。

<https://www.isa-sociology.org/uploads/files/isa-wcs2014-book-of-abst>

ISA の大会や雑誌などで、誰がどういう報告や論文をしているのかのデータベースとしては、以下のサイトも便利である（自分自身についてレコードをチェックし、アップデートに努めるべきである）。キーワード検索も可能である（2020 年のポート・アレグレで開催の第 4 回社会学フォーラム採択アブストラクト分までを収録している）。

<https://www.isa-sociology.org/en/publications/digital-platforms/gms>

日本的常識を相対化する

このように国際的な関与を深め、視野を拡大していくことの意義はどこにあるのだろうか。労多く、スリリングな経験それ自体の魅力もある。自分の学問的なまなざしが国際的にどの程度通用するのかを体感してみることも、とても勉強になる。

もちろん言語の壁は少なくない。けれどももう 1 つの言葉、英語で報告する、英語でセッションの企画を立てる、英語でアブストラクトを書く・読む・選考することをとおして、さらには英語で論文を書くことをとおして得られるさまざまな発見もある。自分自身の思考のしかたや発想法が、母語の日本語にどれだけ依存しているのかを私たちが意識させられることは通常はなかなかない。日本語の報告や日本語の論文には、母語であるがゆえに曖昧なままにすませている部分もある。日本的常識に乗っかって議論してしまっていることもありがちである。言語としての距離の遠い英語で議論してみることは、自分の研究課題や自身の研究の弱点を意識化し相対化する貴重な好機でもある。

一例を示そう。トロントの世界社会学会議の準備段階で、私は RC24（環境と社会分科会）の会長として、session coordinator を務めた。session proposal の採否は、会長、副会長、事務局長、財

務担当者の4役員の合議に付していた。ある日本の研究者からAのようなタイトルのproposalが提出されたが、他の3人は趣旨が「まったく理解できない」からrejectというコメントだった。私は、タイトルをBのように修正して、提案者にもどこが伝わらなかったのかを説明し、session descriptionを再提出してもらって再審議しacceptしたことがあった。私たち日本人にとってはコンクリートと言えば、近代的な建造物のシンボルだが、欧米ではコンクリートは古代ローマ時代から使われている。それで高速道路やダムなどの近代的な建造物による景観破壊や自然の荒廃、騒音などの環境破壊を問題視したいという意図が伝わらなかったのだ。

A: Concrete State: Concrete Constructions as a Burdensome Legacy of Modernity

B: Physical Infrastructure and Environmental Hazards: A Burdensome Legacy of Modernity

2022年の世界社会学会議メルボルン大会は時差も現地が2時間早いのみで、移動距離も航空機代等も比較的少なくすむ。本稿を契機に、是非session organizerをめざしてほしい。

国際学会でのステップアップをめざすことは、あなた自身の研究者としてのトータルな力量のステップアップをはかることにほかならない。

10. 事務局・問い合わせ

- 財務担当 宇都宮 京子
- シンポジウム担当 有田伸・石原俊
- ニュースレター・コンソーシアム通信担当 井上真・白波瀬佐和子
- 事務局 音好宏
事務局補佐 品治佑吉
E-mail : socconsortium[at]socconso.com
([at]を@に変更してください)

発行：2019年12月